



^{おお}大きなカタツムリのマイマイは
ハチドリを見あげた。
「ハチドリさん、やっと見つけました。
こんな^{とお}遠くまできてたんですね」

ハチドリは花^{はな}のわきから顔^{かお}をだした。
「マイマイ？　またあんた？
ついてこなくていいのに」
「だってハチドリさんが心^{しん}配^{ぱい}で。
そろそろ森^{もり}にもどりましょうよ」



たしかにマイマイはすぐに目玉^{め だま}をひきこんでしまう。

でもそれは、殻^{から}のうかがわ^みを見るためだという。

「この目玉^{め だま}で、じぶんのなか^みを見はりたいんです。

心^{こころ}までとけてなくならないように」

「心^{こころ}までとけてなくなる？」

「心^{こころ}は奥^{おく}の方^{ほう}にあるから、なくしても気づ^きかないかもしれません。

そうならないように見^みはりたいんです」

ハチドリは空^{そら}からマイマイ^みを見おろした。
ぶかっこうな殻^{から}をせおい、
のろのろと地面^{じめん}をはいずっている。

そのすがたを見^みているうちに、
たいせつなものがなんだったのか
ハチドリにもわかった気^きがした。

